古高取通信

No.20
平成27年 6月

古高取を伝える会会報

目次

古高取の魅力を伝える……2
古高取紹介……3
活動の記録……3
なんでも掲示板……6

「高取焼との出会い」

梅雨空の下、色とりどりの紫陽花があちらこちらに競うが如く咲き誇っていますが、この時期になると思い出すのは、四十年近くも前になりますが、素敵な高取焼の茶入れとの出会いでした。あるお茶席でのこと、名物裂の仕覆から取り出された茶入に見入ってしまい、思わず「美しい形のお茶入ですが、どちらのですか」と聞くと、すかさず「高取です」との答えが返ってきました。その頃の私は、高取焼発祥の地が直方市との知識もなく、今思うと非常に恥ずかしいことでした。

その高取焼の茶入を思いつつ茶室を出ると、外には色鮮やかで見事な紫陽花の花が咲いていました。

それが私にとって初めての高取焼との出会いだった気がします。

今は、直方で生まれた高取焼を広く世間に知れ渡らせるためのお手伝いが少しでもできればと願っています。

向野　志津絵

古高取の魅力を伝える

文化財保護と「盗掘」

直方市教育委員会　田村　悟

近世の窯跡は盗掘という行為から逃れられないようである。国史跡に指定されても行政が監視人を常駐させるわけにはいかず、唐津の窯跡ではフェンスで囲い、鉄条網を配置するなどの対策をとってきたが、心ない人たちは、鉄条網を切ったり、フェンスの下を掘り込んだりして中に入り盗掘を行う。唐津は陶片であっても、トロ箱一箱分が五千円から一万円で売れるからで、それを求めようとするコレクターにも責任の一端はある。

宅間窯跡

直方市内の内ヶ磯窯跡、宅間窯跡はいずれも盗掘によりひどく荒らされていた。内ヶ磯窯跡の物原では人の背丈以上に深い盗掘坑が無数に掘られており、本来古いほうから順に堆積している陶片の地層があちこちで乱されていた。そもそも、自分の土地以外のところで、土を掘り返すこと自体違法行為であり、価値あるものを自分のものにすることは窃盗である。こうして得られた資料を研究に用いることは、本人に悪意はなくても、その違法行為をある意味容認したことになるのではないだろうか。

福岡県下で行政が組織的に発掘調査を手がけた最初の近世遺跡は直方市の内ヶ磯窯跡である。この調査のきっかけはダム工事が計画されていたことに加え、盗掘の横行を憂いた直方郷土研究会などの民間団体が積極的に遺跡の保護を訴えたことを忘れてはならないだろう。

内ヶ磯窯跡（直方文化財調査報告書 第五集より）

遺跡をめぐる科学分析は日進月歩である。たとえば、プラントオパールと呼ばれる植物の微細なガラス質の物質を抽出することにより、その土地でどんな作物が栽培されていたか推定できるようになってきたが、一旦掘り返された遺跡では、そのような分析は不可能である。ユネスコが一九五六年に総会で採択した『考古学上の発掘に適用される国際的原則に関する勧告』では、加盟国に対し「発掘が考古学的技術及び知識の進歩を享受し得るため、各時代の考古学的遺跡の相当数を全部または一部、手を触れずに維持することの考慮」を求めているように、遺跡は現在に生きる人々だけでなく、未来の子孫に残すべき重要な共有財産なのだから、行政では、基本的に工事等によっての破壊も最小限に抑え、破壊が免れ得ない箇所のみの発掘調査を実施している。盗掘は、遺跡の破壊行為であり、このような遺跡保存の理念と相反するものであることは論を待たない。

もっとも、地表面に落ちている遺物を採集し、歴史を考察することは禁じられていないし、過去に陶芸家が、自らの作品の参考として、窯跡から遺物採集を行ってきたことは責められるべきではない。ただし、無断で他人の土地の掘削を行うという一線を越えたとき、それは犯罪行為になってしまう。

学術的な発掘調査で出土した遺物には、一点一点、面相筆や、それに変わる機械で、出土した遺跡や、出土位置が注記される。しかし、盗掘品は価値を下げないように、このような注記が行われないことが多い。そうすると、所有者が転々としているうちに、どの窯跡から掘り出されたものかわからなくなってしまうことがある。考古学では、出土した遺跡と出土状況が記録されたものを一級資料、出土遺跡の記録はあるが、出土状

況がわからないものを二級資料、出土遺跡も、出土状況もわからないものを三級資料と呼んでいる。三級資料は、どんなにすばらしい資料であっても研究に使用するのは危険である。贋作の可能性が入り込むからである。

　また、盗掘された資料は、完形品はいざしらず、陶片となるとコレクターが逝去したあとに処分されることもあるだろう。心ない人々によって掘り出され、行き場を失った多量の陶片を今後どのようにあつかっていくのかも、焼物を愛する人たちに課せられた大きな課題だと感じている。

古高取紹介

【内ヶ磯窯跡出土の茶入】

副島　邦弘

肩付尻膨茶入

　筒形の肩付茶入である。ほぼ完形に近いもので、出土地区は焚口の覆土から出土している。これは、上の焼成室より落下したものである。口径三、〇cm、器高八、五cm、底経四、〇cmを測る。胎土には漉した精良な粘土を使用したもので、色調は暗茶褐色を呈し、鉄釉が溶けて露先(なぐれ)を呈している。明瞭な肩部を有し、最大径を胴下半に持つので安定感のある器形である。胴部にヘラ先の沈線一条を巡すもので、口唇の頸の立上がりは〇、六cmで、唇部捻り返しは外方へ引き出す。器内面は轆轤目で、器壁〇、三cm前後で、底部の畳味付は若干の上げ底で厚さは〇、四cmをなしている。轆轤仕上げ整形である。姿は美しく整っている。

肩衝尻膨茶入　口径 3.0cm　器高 8.5cm　底経 4.0cm

活動の記録

●学習部会

〈平成二十七年三月二十九日(日)〉
時間：十時三十分(出発)
コース：福岡城～光雲神社～崇福寺

　初めての参加でした。胸をドキドキさせながら集合場所に着くと、係の方の優しい笑顔と対応に出合い、ドキドキがワクワクに大変身です。

　何十年ぶりの西公園では、桜満開の中でおおほり祭が開催されていて、思いがけず武者行列などを見ることができました。公園の中にある光雲神社は、大河ドラマの影響もあり、興味深く拝見させていただきました。

　福岡城祉見学では、ここも花見客で大賑わい、桜に興奮するのは老いも若きも同じようです。天守閣に見立てて作られた高台で先生のお話を聞きながら、素晴らしい眺めを満喫いたしました。黒田官兵衛、長政親子もここから福岡の地を眺めていたのでしょうか。

　ちなみに、光雲神社で引いたおみくじは大吉でした。みくじ通り心豊かないい一日でした。

成清一枝

●福岡県立大学茶道部焼物教室
（地域対象の焼物教室）

〈平成二十七年四月十八日(土)〉
場所：明元寺(直方市永満寺)

　福岡県立大学茶道部の皆さんと茶碗づくりと野点を楽しみました。

　明元寺の藤の花は、七分咲き。境内の裏庭にはタケノコがにょっきり。心地よい風の流れの中で、茶碗づくりに挑戦する学生さんとおしゃべりしながら、しかし手は上手に粘土に力を込め、あっという間に抹茶々椀が出来上がりました。

その後、河面さんのご指導で野点。藤棚の下は凛とした、しかし和やかな雰囲気の中で、春のお菓子とお茶を満喫しました。
　県立大学の皆さん方の若いエネルギーに圧倒されつつ、再会を約束して春の一日は終わりました。

柴田ムツ子

●平成二十七年度定例総会

〈平成二十七年五月十六日(土)〉
場所：直方中央公民館三階会議室
記念講演：高取焼 陶工として生きる
(講師)高取八山氏(高取焼宗家十三代)

　平成二十七年度定例総会が開催され、今年度の事業が正式にスタートしました。今年度は少し余裕を持って着実に事業を実施したいと思います。皆様、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

記念講演の内容は次のとおりです。

高取宗家十三代
高取八山さんをお迎えして

副島 邦弘

　平成二十七年度定期総会の記念講演を筑前国焼高取焼宗家小石原鼓の静山窯を守っていられる十三代高取八山をお迎えして、『陶工として生きる-高取焼の魅力-』という題でお願いした。
　高取焼の系譜では初代は八山は、宅間・内ヶ磯・山田・白旗山で承応三年（一六五四）になくなっている。二代八蔵貞昭が小石原鼓に寛文五年（一六六五）に築窯し、茶陶を中心に焼いて、藩の御用を勤めていた。
　その後、高取家は掛け勤めとして、小石原の鼓で半年、東皿山で半年の半期奉公を継続して、御用窯として明治四年（一八七一）まで続き廃業されたが、昭和三十二年（一九五七）高取静山氏（十一代）が窯を再興され、現在の高取八山氏はその孫にあたる。
　講演の主題は、初代八山は韓国のどこからやってきたのかを自ら踏査された結果を中心に話された。初代高取八山のルーツを探ねての旅であった。
　高取焼の発生は、豊臣秀吉による文禄・慶長の役に起因する。これには加藤・黒田両家が関与している。両軍とも慶尚道（嶺南地方）を通過している。すなわち、高取八山・井上新九郎等を連行されたのは慶尚北道高霊郡雲水面の周辺部の陶工として生活をしていた人達であった。
　いわゆる伽耶地区で、周辺の器の目跡の数で説明された。高取・上野焼には三～四の目跡があり、この地区は古代には任那日本府の地域で石は朝鮮カオリンの産地でもある。井上茶碗の産地でもある。熊川のものは目跡が五～六である。

また、加藤清正は会寧まで侵出していたもので、会寧窯の特徴である藁白の釉薬が高取焼に入っていると言われる。しかし問題である。日本に帰化した八山・尊楷・李参平・金海等の焼物について説明がなされた。
　茶入の好みについても、時代背景は為政者の好みとなり、最終的には徳川家康好み＝遠州好みで、豊臣の古田織部好みを消している。と結ばれた。
　参加者の質問があり、内ヶ磯の窯印について、「王」字の窯印は美濃系の渡り職人の手で「二」字も美濃系で「松葉」と「一」字が高取ではなかろうかと説明された。基本的には窯印は職人の印と(袋)※買いした商人の印とも言われるが、詳細なる答えは出ない。何故、内ヶ磯のものに多いか興味を引くものである。窯印は!!
　八山と新九郎は、結論的には嶺南地区の高霊郡の出身であったというものであった。
　陶工は陶工の娘との婚姻が慣例であったと思われる。

以上

※窯の室のことを袋という。

●子供焼物教室

〈平成二十七年五月～十月〉
場所：直方市内の小学校

　今年度も市内十一の小学校で、六年生を対象にした子供焼物教室が始まり、五月二十六日（火）に今年度最初の体験焼物教室を感田小学校で行いました。
　六年生百二十六名ということで大人数です。スタッフは十六名。校区の方にも声をかけ、参加して頂きました。子ども達は、事前の説明を真剣に聞き、十六グループに分かれました。

　私たちが担当したグループでは、土を手にした子ども達は、少しとまどった様子でしたが、少しやってみせると後は、どんどん茶わんを作り始めました。さすが六年生ですね。器用に指を使って、茶わんを形づくっていました。
　当日は気温が高く乾燥していたせいか、土も乾きやすく、茶わんのふちの部分がひび割れて苦労していました。
　最後のイニシャルや絵を描く作業は楽しそうでした。出来上がった茶わんに満足したようで、スタッフとしてもひと安心しました。

倉田豊子

●鞍手幼稚園焼物教室

（地域対象の焼物教室）
〈平成二十七年六月六日（土）〉
場所：鞍手幼稚園
参加者：五十六名

　年長組五十六名が親子で焼物教室を体験しました。子供たちはとても熱心に取り組み保護者の方といっしょに楽しく制作に励んでいました。ハート型の作品などもありましたが卒園まえのお茶会で使用するお茶わんがりっぱにできあがっていました。
　今回はＮＨＫのテレビがはいり、夕方のニュース番組で放映されま

した。
子供たちにとって、とても思い出に残る焼物教室になったのではないでしょうか。

永冨セツ子

●学習部会

〈平成二十七年六月〜十月〉
時間：十三時三十分〜
場所：えみくる（直方市中央公民館横）

今年度の学習部会は、「戦国武将と茶の湯」をテーマに全四回の講義と、まとめ講演、その他現地視察を行う予定です。
皆様、お誘い合わせの上お越しくださいますようお願い致します。

【学習会】のお知らせ
第一回：二十七年六月二十六日（金）
戦国武将とお茶の背景
第二回：二十七年七月二十四日（金）
周防大内氏とお茶
第三回：二十七年九月二十五日（金）
出雲尼子氏とお茶
第四回：二十七年十月二十三日（金）
豊後大友氏とお茶
まとめ講座は、十一月下旬を予定しています。

なんでも掲示板

●第五十回 高取焼陶器まつり

〈平成二十七年四月二十四日（金）〜二十六日（日）〉
場所：直方市畑・永満寺地区

直方の地元窯元や畑公民館等で、陶器販売はもちろん、地元の農産物や特産物等の販売も行われました。

●金剛山もとどり協議会だより あじさい鑑賞会

〈平成二十七年六月十三日（土）〜七月十二日（日）〉
場所：金剛山もとどり広場

本年は六月十三日（土）から七月十二日（日）までの予定で「あじさい鑑賞会」として里山を皆様に開放致します。
二千五百本にまで増えたあじさいが山の斜面、木々の下から皆様をお迎えすることでしょう。
挿し木を希望される方は、七月十二日（日）以降に自由に取って頂きます。事前に色をチェックしておいて下さい。
昨年は内ヶ磯窯四百年祭で多忙な一年を過ごしました。今年は充電の年です。会員の皆様、陶芸スタッフ等、関係者の方々との親睦会を計画しています。

日時は八月二十六日（水）頃を予定していて下さい。楽しみにしていて下さい。

末松登志子

●平成二十七年 夏季展 「九州の「へうげもの」―知られざる織部高取焼」

〈平成二十七年六月二十日（土）〜九月十三日（日）〉
場所：古田織部美術館
（京都市北区大宮釈迦谷十の三十七）

織部好みの焼き物といえば、美濃・唐津焼が著名ですが、それだけではありません。かつて九州には、高取焼内ヶ磯窯という名窯が存在しました。
本展は、京都では初となる、内ヶ磯窯に焦点をあてた展観です。
小山コレクションと古田織部美術

館の所蔵品を中心とする約二百点を出展、美濃焼と比較して展示することで、両者の共通点・相違点を明らかにします。作者のサインにあたる窯印や、作行など、織部好みの伝播の痕跡にご注目下さい。

高取焼に関する投稿をいただきましたので、少しだけ紹介させていただきます。

遠州の御用達

古高取研究家　小山　亘

高取焼の指導者と言えば小堀遠州で、遠州と言えば茶入と言うように高取焼と遠州と茶入を切り離して考える訳にはいきません。実は、遠州の茶入の制作に協力していたと言う史実を茶道史に遺す名工に別所吉兵衛と言う人物がいます。彼は子孫のために『一子相伝書』を遺していて、そこには次のような下りがあります。

写真① 高取肩付茶入（織部好み）　福岡市美術館所蔵

一　我十八歳より今に至る迄細工を習ひ焼くといへども生得拙出来ず然れとも近年、遠州公の御眼がねに預り古瀬戸を摸すといへども中中似るべき物にてもなし。

（小田栄作氏写本）

また吉兵衛はこの伝書の中で次のようなことも言っています。

（前略）　茶入薬組は格別、姿第一のものなり姿細工下手にては茶入の内に不入、依て利休居士次ては織部様遠州様など御目利、先ず姿第一に吟味有し事なり。

（小田栄作氏写本）

この一文の裏を返せば、利休・織部・遠州の好みの姿の茶入が存在することが伺えます。内ヶ磯窯は、時代的にも織部と遠州の影響を受けていた時代の窯であることは間違いありません。

写真② 高取耳付茶入（遠州好み）　福岡市美術館所蔵

今回紹介している『別所吉兵衛一子相伝書』の内容からすると、別所吉兵衛は利休時代からの陶工で十八歳から修行を積んだベテランの茶入師と言うことで、さらに高取八蔵と親子ほどの年齢差のある人物と言うことになります。そんな吉兵衛が内ヶ磯窯に訪れていたとなれば、年下の李朝陶工・八蔵に内ヶ磯窯で遠州好みの茶入の焼造方法を教えることは十分可能です。

ちなみに遠州の御用達とも言うべき別所吉兵衛には「茶器『二』印は別所吉兵衛」と言う渡り陶工の間に伝えられてきた口伝があります。内ヶ磯窯では、底部に「二」印が記された典型的な織部好みの意匠の様々な器種の茶陶が焼かれていました。

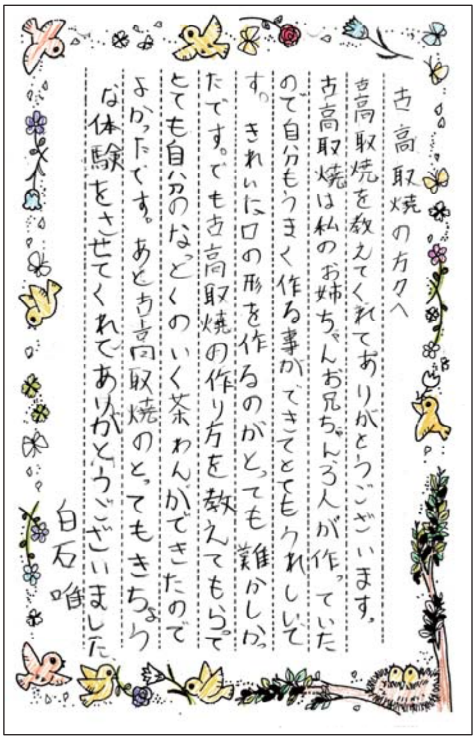
福岡市美術館には、内ヶ磯窯製として公式に認められた「二」印の茶碗・水指・花入の他に茶入が二点所蔵されていています。そのうちの（写真①）は織部好みで、（写真②）は遠州好みの手本と言うべき典型的な姿の茶入なのです。写真の二点の茶入が吉兵衛作だということになれば益々吉兵衛が八蔵に茶入の成形を教えた人物と考えてよさそうです。

また、吉兵衛は略称『別所伝書』の中で「茶入薬組は格別」と言っています。吉兵衛が八蔵にこの「格別の薬の組み合わせ」や「調合」も「成形」と同様に教えていたのではないでしょうか。そう仮定して『高取家文書』「雄山閣」に目を通して見ると、釉薬の生成方法が『別所伝書』に克明に記されている、門外不出・奥義秘伝の釉薬「春慶薬」の名称が、八蔵の時代に完成していた「二十二色の釉薬」の但し書きの中に記されているのです。

※写真は、二〇〇五年福岡市美術館「大名茶陶」高取焼展図録より

子供焼物教室の感想文をいただきましたので、少しだけ紹介させていただきます。

感田小学校六年一組　西 百々歌



感田小学校六年二組　白石 唯

感田小学校六年三組　阿部 優里美

感田小学校六年四組　今井 雪乃

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉
今年度の事業が正式にスタートしました。子供焼物教室や古高取基礎研修講座など着実に実施しています。広報としても、古高取の魅力をもっと多くの人に伝えられるよう考え、着実に実施して行きたいと思います。
皆様のアイディアも募集していますので、ご意見などお寄せくださいませ。
今後ともご協力くださいますよう宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO20
〈発行〉
古高取を伝える会
〈発行日〉
平成二十七年六月三十日
〈現在の会員数〉
正会員　五十四名（五十四口）
賛助会員　十八名（二十七口）
団体　一団体（一口）
〈マイ茶碗の数〉
五千二百七十一個
〈事務局〉
〒八二二-〇〇二六
福岡県直方市津田町七-十四
TEL〇九四九（二三）一三二一